



I



II



III

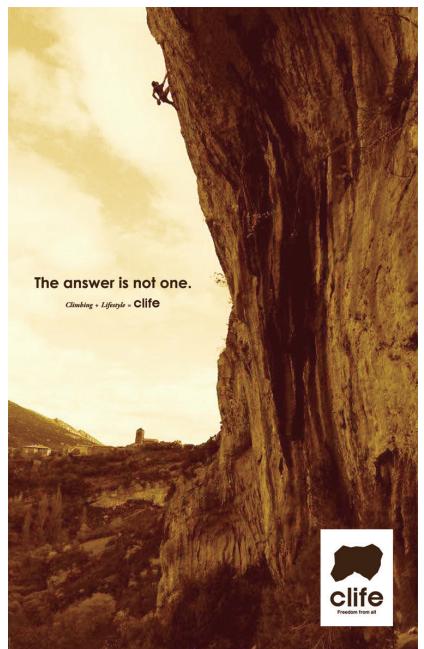
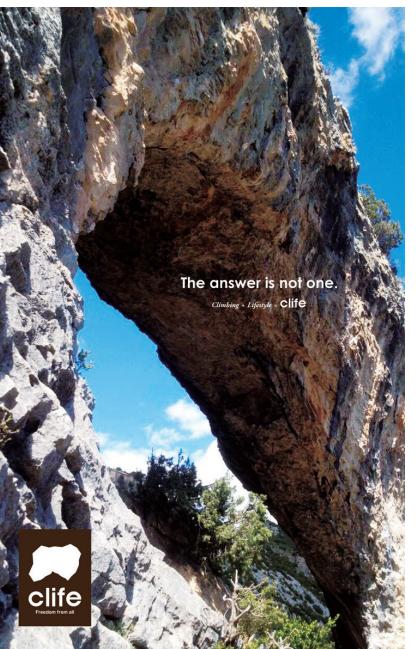


V

VI



「rolca on the notes」I. カタログ(P/田中園子 I/タケシマレイコ) II. パースデーカード(P/田中園子) III. プロモーションポスター(P/田中園子)

The answer is not one.
Climbing + Lifestyle = clifeThe answer is not one.
Climbing + Lifestyle = clife

DESIGN WORKS

rolca on the notes, waltz for rolca, clife / ブランディングデザイン

洋服と立ち振る舞いで、人も幸せにする

—— サプールから学ぶエレガントであることの大切さ ——

田中雄一郎／グラフィックデザイナー、ブランディングディレクター

いつから始まったのかわからないが、地元岡山には卒業式後の中学3年生らが毎年、派手な柄や刺しゅうを施した「特攻服」や学生服でJR岡山駅前に集結する因習がある。先日その行為を巡り、「非行を助長する」と岡山県警や県内の教育委員会が対策に乗り出し、今年は100名を超える警察官らが警戒にあたったというニュースが全国的に報道された。

と聞くとさぞ乱暴狼藉をはたらいているのでは想像するかもしれないが、毎年さほど大きなトラブルはない。むしろ身に纏う特攻服や学生服には意外とセンチなことが書いてある。恩師や親への感謝の言葉だったり、これから将来に向けての誓いであったり、仲間との思い出や今の気持ちを詩に綴ったり…。

良し悪しは別にしてこうした独自の文化を生み出す力はたいしたもので、この子達が表現したい気持ちもわかる。ただ公衆の面前での表現と立ち振る舞いが自分達本位になり過ぎていて、人にどのような印象を与えているのかを考える必要があるのではないか。

「繊維の街」を標榜する岡山ならば、洋服はエレガントに着こなさなければならない。アフリカ中部に位置するコンゴ共和国にサプールと呼ばれる人たちがいる。サプールとはフランス語の「お洒落で優雅な仲間たち」の頭文字をとったSAPE (サッブ) を語源としており、20世紀中期の高貴なパリ紳士の盛装に身を包み、帽子と葉巻やパイプ、ステッキなどの小道具とともに、街中を闊歩する人達を言う。ただお洒落な衣服を身に纏っているだけではサプールにはなれない。他者への紳士的な姿勢や優雅な立ち振る舞い、そして多様な価値観を受け入れる熱意などを身に付けていかなければならない。

またアルマーニ、イッセイ・ミヤケなど一流ブランドのスーツを身に纏ってはいるが、ブランドが重要なわけではない。自分のスタイルに合

わせて洋服を選ぶ才能こそが重要なのだという。

そしてサプールは喧嘩や争いはしない。理由は簡単、洋服が汚れるからだ。サプールは決して富裕層というわけではない。コンゴ共和国の平均年収は2万円にも満たない。つまり半年分の給料をつぎ込んで買った洋服を着ているのである。サプールは人生をかけて「武器を捨て、エレガントな装いをしよう」と強く平和も願っている。

自分に合った最高のお洒落をし、エレガントで争わない。それがサプールである。その存在は街の人々を勇気づけるエンターテイナーとして魅力的で人々から尊敬され、憧れの的になっている。エレガントに洋服を着ることは精神を養い、身体を幸福で満たしてくれる。だから彼らは仮に三度の食事にありつけなくとも幸せだという。エレガントであることの大切さを伝えることは人々にとって良き教育にもなり、貧困を抜け出す手段ともなり得るらしい。

数年前になるが倉敷市児島にアトリエを構え、全国に展開するアパレルブランド「rolca on the notes」のカタログやDM、そしてニューライン「waltz for rolca」のブランドマークデザインなどを担当した。時代に左右されずにいつまでも心地よく着られて愛される服…」をコンセプトに、落ち着いて気品があるエレガントなモノづくりを行っている。誰かが「本当のエコとは良いものを長く使うこと」と言っていたが、まさにそれを体現しているブランドだ。

サプールを見ていると自分がお洒落を楽しみ、幸せを感じることで、人にもその幸せをお裾分けしているように思える。エレガントな洋服と振る舞いは人も幸せにできる。岡山駅前がいつの日かエレガントな若者達で溢れる日を楽しみに待つとしよう。

AD-D / 田中雄一郎 CL / 株式会社ユニアート・ヤモリ、児島株式会社 参考本 / SAPEURS(青幻舎)

田中雄一郎 / Yuichiro Tanaka www.quadesign-style.com
QUADESIGN style (クオデザインスタイル)代表



© SAPEURS SEIGENSHA

1975年岡山市生まれ。立命館大学理工学部卒業後、都市計画コンサルタントを経て、2004年妻・園子とともにQUADESIGN style設立。同時にデザインを独学。現在岡山を拠点に活動し、教育・医療機関、公共施設、美術展、建築・建設、農業、アパレル、町など様々な分野のブランディングを手掛ける。主な仕事に岡山大学シンボルデザイン、倉敷市立短期大学ロゴマーク、福武教育文化振興財團CL、ルネスホールVI、宇野バス、岡山後楽園バスVI、まび記念病院III、出石町VI、野の花農園プロモーションなど。東京TDC賞PrizeNominee、JAGDA賞ペネートなど。共著に「ロゴデザインの現場—事例で学ぶデザイン技法としてのブランディング」(MdNコーポレーション)